

第6章 花きに関する研究

第1節 研究の変遷

徳島県の花き営利栽培は、明治35年勝浦郡勝占村(現徳島市方上町)の町田瀧次郎氏によって始められ、同氏の指導により逐次栽培者と面積が増加し、明治38年には徳島市の加藤氏により温室が建てられ、鉢花が生産されていた。また、大正10年には小松島町でも30坪余りの温室ができて、副業的ではあるが花き生産の機運も高まりはじめた。昭和3～5年にかけて、徳島・小松島について、板野郡藍園村(現藍住町)と松茂村(現松茂町)にそれぞれ300坪余りの大温室が建てられ、バラや球根草花の本格的な営利切花生産が始められた。

しかし、花き園芸業としての発展をみたのは、第2次世界大戦後で、昭和23年に全県を対象とした徳島県輸出花き園芸農業協同組合が設立されてからである。

昭和25年度から県は花き園芸の重要性を認め、行政施策を講じて花き増産を奨励し、優良品種の導入、花き経営実地指導地を設置して栽培指導を行うようになった。その後10年間に花き生産は急増し全県的に花き生産が広がり、昭和35年頃には、国府町の電照ギク、鳴門市のチューリップ、石井町や海部郡のテッポウユリ、入田町のヒメナンテン、その他枝物花木についても全国有数の生産が行われるようになった。その後、種類や産地の移動はあったが着実に生産は増加し、昭和57年には生産額にして約30億円に達している。

1. 明治・大正・昭和(戦前)時代

明治41～43年に農事試験場業務の一環として、試験場空地利用を兼ね花き数十種を試作するとともに種子を一般に配布し、花に関する業務は古くから行われている。しかしその後の業務には花に関するものはまったく見当らず、断片的にその時代の状況に即応する形で業務が行われたものと思われる。

大正15年に初めて徳島県立農事試験場に24坪の温室が建てられ、当時すでに徳島市や小松島町で温室による鉢物栽培があったが、花き研究に供した事例はなく、また昭和13年に62坪の温室が増改築されたが、その後も野菜・果樹を中心にした研究に利用された。

2. 昭和時代(戦後)

(1) 研究体制

昭和25年に徳島県立農事試験場に天皇陛下の巡幸があり、これを記念して同年3月に24坪、7月に32坪の温室が建てられた。当時農事の園芸部においては果樹と野菜を中心に研究が行われていたが、ちょうど徳島県の花き生産の気運が高まり、行政も花き生産振興に力を入れ始めた時期でもあって、これを機会に果樹との兼務で、花き研究員が普及所の定員で園芸部に配属され、農業試験場で花き研究が進められることになった。翌年、4月からは花き専任の研究員がおかれ、花き研究の基礎作りを始めた。この頃から本県の花き生産も行政指導のもとに伸びはじめ、キク・チューリップ・ユリ等現地の要望に応えるべく研究が行われるようになった。その後10年余りで生産も急増し、それに伴って試験場における花き研究員も昭和38年に1名増員され、2名の研究員で花き栽培の研究を進めるようになった。また昭和39年には、24坪のブドウ温室を花き温室に改築し研究圃場も漸次拡大された。

昭和46年試験場の移転に伴い、花き研究施設圃場等が整備拡充され1棟100㎡のガラス室5棟、ミスト繁殖用施設、低温処理用冷蔵庫20㎡等が設置されるとともに露地圃場も20aと拡大された。また翌47年には花木見本園20aが加わった。移転当初は圃場の排水が悪かったので土作りに専念し海砂を客土するとともに、圃場の天地返しをはじめ暗きよ排水等も試みた。しかし3年経過後、圃場の排水不良から花木見本園は断念せざるを得なくなった。

組織・機構面では花き研究発足当初から園芸部(昭和32年園芸科に改称)に属してきたが、昭和55年4月に花き研究のより一層の充実をはかるために花き科が誕生し、園芸実験室の一部を研究室にあて、研究員2名、技師1名、臨時雇用約1名、ガラス室1棟100㎡5棟、ビニールハウス50㎡4棟、ミストハウス60㎡、冷蔵庫20㎡、作業室2部屋、露地圃場20aで出発し、現在にいたっている。



(2) 試験研究

① 切花

昭和25年に花きの研究が始められ、見本的花き栽培としていろいろな種類が導入された。しかし研究の中心は、ガラス室を利用したストックやカーネーションの切花栽培技術改良試験であった。その後昭和30年頃から寒ギク・県内産テッポウユリ・アスター等の不時栽培における品種の適応性試験を中心に、昭和38年頃まで続けられた。

昭和35年頃から流行したれき耕栽培について、テッポウユリ・キクなどの試作を行った。その後夏ギクなども導入されるとともに、集約化された花き栽培には非常な労力を要するところから切花栽培での省力化が問題となり、除草剤の研究が昭和42年まで続けられた。

昭和43～48年頃までは、チューリップ・テッポウユリの品種や球根冷蔵法など、球根類の促成栽培技術を中心に試験を行うとともに、キクの作型別品種の適応性や育苗技術の研究を行った。また昭和46年に本県特産花きで関西市場を独占していたヒオウギにウイルス病が大発生して全滅の危機にたたされ、耕種的防除技術の確立と開花調節技術の解明をはかった。

昭和50年代に入ってから、キク・ヒオウギの新品種の育成、球根草花の切花品質向上技術の解明、第2次オイルショックに伴う省エネルギー対策試験が取り上げられた。昭和50年中頃からは新しい花きとして、スターチス、新テッポウユリ等の研究が加えられるようになった。

② 鉢花

シクラメン、シネリア(サイネリヤ)等を中心に、昭和25～30年代後半までは試作を行い、昭和30年代後半から試験に取り組み数年間研究を行ったが、鉢花の増産傾向がみられず一時中止した。しかし、昭和54年頃から本県の花き生産も増加の傾向がみられるようになり、再び鉢花研究の必要性が高まったため、シクラメンを中心に夏場の鉢花の試験を始めた。

③ 花木

徳島県の花き園芸の生産は、関西では大阪・兵庫に続く産地として有名であるが花木としての花木がなく、高温多雨の自然環境に適したナンテン・ヒバ・イブ・キ・チョウセンマキ・マサキ等が多く、栽培技術上の問題は少なく、現地からでてきた断片的な問題の解決にあっていた。したがって体系だった試験は少なく、昭和30年代初期にバラの品種試験を、また40年代初期には当時全国一の生産を誇ったヒメナンテンの品質向上試験を行い、昭和47年にはイブ・ヒバ等の繁殖(挿木)の試験、またツツジの品種特性調査を昭和53年に行った。

④ 球根養成

徳島県における花き球根生産は、テッポウユリ・カノコユリ・アイリスが中心で、昭和24年に現在の石井町高原でテッポウユリの球根生産が始められ海外にも輸出された。これに刺激されて昭和28年頃から県南の海部郡でテッポウユリ球根自家生産による切花栽培が始まった。中部山間地に位置する名西郡神山町では、古くから庭先にあったカノコユリに目をつけ、これをもちに昭和25年頃から球根生産を始め、昭和28年からこの輸出が始まっている。

これらユリ類の他に昭和35年頃から水田裏作にアイリスの球根生産が、徳島市国府町を初めとする吉野川下流の水田地帯で始められた。

このような背景のもとにテッポウユリでは昭和30年から40年にかけて、植付時期、栽植方法、施肥、除草剤、病害虫防除等の試験がなされた。昭和40年に入ってからウイルス病の発生が多くなり、良質球選抜によるりん片繁殖技術の解明、種球貯蔵方法などの研究が行われた。しかし、昭和48年のオイルショック以来、テッポウユリの切花生産が衰微の道をたどるようになり、研究も中止せざるを得なくなった。

カノコユリでは昭和34～35年にウイルス病予防試験から始められたが、昭和42年カノコユリ球根需要状況が大きく変わり、ウイルス保毒率の高い日本産球根がオランダ産に押されて売れなくなったため球根生産が止まり研究も中止せざるを得なくなった。

アイリスについては昭和39～42年にかけて、植付方法をはじめ種球の貯蔵・除草剤等の研究が行われた。

⑤ 品種改良

昭和33～36年頃に本県山間部に自生するユリの中で優秀なカノコユリのあることがわかり、このユリの生い立ちについて研究がなされた。昭和40年代後半からは本県の特産花きであるヒオウギの早生系の選抜育種をはかるとともに、昭和50年代にはヒオウギの授粉メカニズムと品種の遺伝的形質の固定研究を行っている。また昭和51年度から菊の品種改良に着手した結果、優良2品種を作出し54年にそれぞれ“阿波娘”“阿波錦”と名付け、農家へ苗の配布を行うと同時にこれら品種の特性調査を進めながら、現在も交配育種をすすめている。



昭和38年に1名増員され、2名の研究員で花き栽培の研究を進めるようになった。また昭和39年には、24坪のブドウ温室を花き温室に改築し研究圃場も漸次拡大された。

昭和46年試験場の移転に伴い、花き研究施設圃場等が整備拡充され1棟100㎡のガラス室5棟、ミスト繁殖用施設、低温処理用冷蔵庫20㎡等が設置されるとともに露地圃場も20aと拡大された。また翌47年には花木見本園20aが加わった。移転当初は圃場の排水が悪かったので土作りに専念し海砂を客土するとともに、圃場の天地返しをはじめ暗きよ排水等も試みた。しかし3年経過後、圃場の排水不良から花木見本園は断念せざるを得なくなった。

組織・機構面では花き研究発足当初から園芸部(昭和32年園芸科に改称)に属してきたが、昭和55年4月に花き研究のより一層の充実をはかるために花き科が誕生し、園芸実験室の一部を研究室にあて、研究員2名、技師1名、臨時雇用約1名、ガラス室1棟100㎡5棟、ビニールハウス50㎡4棟、ミストハウス60㎡、冷蔵庫20㎡、作業室2部屋、露地圃場20aで出発し、現在にいたっている。

